

タイの大学院におけるフィールドワーク教育

スラポン・ダムリクン *Suraphon Damrikul*

チェンマイ大学

みなさん、こんにちは。はじめに、私は日本語が話せませんので、今回の発表はタイ語で行わせていただきますことをお許しください。また、この度は名古屋大学大学院国際開発研究科の日置文香さんに通訳をお願いしたいと思います。ここにいる皆さんとのコミュニケーションがより円滑にできればと思います。私は、文学部の加藤久美子先生からワークショップのお話を頂きまして、この文学研究科がどうしたら学生にもっとフィールドワークの機会を提供することができるか、ということを探られているということで、本日は私が勤めていますチェンマイ大学¹⁾におけるフィールドワーク教育の経験についてお話ししたいと思います。

まず、私のフィールドワークの経験からお話ししたいと思います。私はタイの教育省の学芸（ファインアーツ）部門に考古学者として20年間勤めていました。私の仕事は考古学の調査と発掘、そして遺跡の修復でした。その後、チェンマイ大学の美術学部に移籍し、常勤教官として働くことになりました。今年で13年になります。以前の職場での経験を生かし、美術史と研究方法論についての授業を開講しています。私は、チェンマイ大学の学部課程と修士課程²⁾の授業の責任者であり、とくに修士課程では地域研究とメディアアート・デザイン学科で修士論文作成の相談を受け付けています。この2つの学科は、学際的な研究に力を入れているという特徴があります。



修士課程における授業や学位論文の作成は、日本の大学とタイの大学では同じようなプロセスを持っていると思います。また、学生の多くは大人であり、自分で行動し、責任を取らなければなりません。したがって、授業は学部の学生の授業とは異なる性質を持ちます。レポートの作成も、受講する授業や教授によって異なります。一方、学位論文の作成も研究テーマや指導教官によって異なります。

したがって、本日ここで話しするように頂いた、「どうすれば文学研究科の学生がフィールドワークの手法を学び、フィールドワークの機会を増やすことができるか」というテーマはかなり難しいテーマだと思われます。修士課程の学生がフィールドワークをするかしないかは、専門分野や研究テーマにもよるからです。しかし、名古屋大学文学研究科は人類学や考古学、美術史などフィールドワークを必要とする研究対象を取り扱っている専攻が既にあることが分かりました。しかし、歴史学や文学などフィールドワークの機会が少ない専攻もあります。

例を挙げますと、歴史学専攻の研究は史料に関するものがほとんどです。したがって、フィールドワークの機会が多くありません。しかし、研究室や図書館で座って研究するほうが多いというアームチェア型は、チェンマイ大学の歴史学の学生に関しても同じようなものです。しかし、チェンマイ大学は教授と学生と一緒に研究をする機会があります。例えば、市街地であるか田舎であるかを問わず様々な寺院にある文書を調査する研究プロジェクトなどは、重要なフィールドワークの1つです。歴史学や関連する分野の学生にフィールドワークを行わせることで、より多くのデータと知識を得ることができます。

地方の人々が語る言葉から情報を収集するという地方歴史学の研究プロジェクトも、また異なるスタイルのフィールドワーク研究で、教授と研究者と学生と一緒にフィールドワークを行うことができ、またこのようなテーマを選んで論文を書く学生もいるかもしれません。いずれにしても、チェンマイ大学の2つの学科

での授業や論文の相談といった私の仕事の場合は、それほど問題はありませぬ。というのは、これらの学科は2つとも学際的な研究という特徴を持っているからです。学生による研究や修士論文のほとんどは、既にフィールドワークに関係するテーマです。

地域研究の修士課程における研究は、東南アジア地域、特にメコン川流域の国々において学生が精通している様々な学問分野で研究をしたり、論文を書いたりすることに重点をおいています。様々な学科の学生を受け入れており、研究のテーマも学生によって異なります。例えば、経済学なら、学生はラオスのルアンパバーンの地方経済学についてのテーマを選び研究することができます。その場合、指導教官や論文審査員も経済の先生ということもあります。

メディアアーツ・デザイン学科においても同様に、様々な学科の学生を受け入れていています。教育は、デザインを含め、メディアアートや応用芸術に重点をおいています。論文の作成は学生が選ぶテーマによりますが、例えば、コンピュータサイエンスの基礎を習得している学生は、アニメーションデザインを選ぶかもしれません。あるいは、芸術に関する基礎がある学生はアートデザインやメディアアート・デザインに関する論文のテーマを選ぶかもしれません。指導教官もそれぞれの学科の教授ということになります。

しかし、学生に学位論文のアドバイスをする際にいつも問題となるのは、方法論の基礎というのがそれぞれの分野で異なるということです。学部課程では、そのような授業がある学科もあれば、ない学科もあります。したがって、修士論文のアドバイスも学生によって様々であり、異なる対応をしなければなりません。しかし、私自身に関しては学生に課題を与えてそれを行わせ、説明して少しずつ学生に理解してもらうようにしています。はじめから論文テーマの決定まで話し合いをしたあと、リサーチプロポーザルを書かせます。そして、それを提出してもらい、書き直しをしたりアドバイスを与えたりします。

次のステップでは、資料や先行研究を読ませます。そしてそれを文章にして提出させ、書き直しをしたりアドバイスを与えたりします。それからデータを集めさせます。フィールドの情報を収集する場合、時々私も一緒に情報を収集に行きます。そして学生に情報を分類させ、提出させます。それから、学生に分析と解釈をさせ、まとめの報告書を提出させます。最後のステップは、学生に最終レポートを書かせ、提出させます。



聞いた限りでは大学院の論文の作成において、名古屋大学とチェンマイ大学で異なる点は論文作成過程にあるようです。名古屋大学ではゼミがあり、学生に研究成果と修士論文の進捗を他の学生や教授に発表します。しかし、チェンマイ大学では修士論文の作成ステップは指導教官にあり、ゼミはありません。ゼミは授業中のコースワークで行うことが多いです。コースワークでは、教授が学生に調査をさせてレポートを書かせ、そして授業で報告発表を行うのです。

いずれにしても、修士の学生にフィールドワークの機会をより多く提供するということは、以下の2つにあると思います。1つ目に、教授と大学側がフィールドで情報を収集するような研究プロジェクトを持っており、共同作業をする練習として学生を参加させること。

2つ目に、学生がもっとフィールドワークに関連した修士論文のテーマを設定するように、奨励し、アドバイスすること。

本日は、お招きいただきありがとうございました。

注

- 1) タイ国北部の学術研究・教育の中心となっている国立の総合大学である。バンコクに次いでタイ国第二の都市であるチェンマイに位置している。
- 2) タイ国の大学院には修士課程までしかなく、博士の学位取得を希望するものは、外国の大学院に進学したり外国の大学院の学位申請資格をとって学位を申請したりする必要がある。

発表者、スラポン・ダムリクン (Suraphon DAMRIKUL) 教授について

タイ国チェンマイ大学美術学部タイ芸術学科教授、チェンマイ大学研究サービスオフィス相談顧問であり、2006年11月・12月の2か月間、日本学術振興会外国人招へい研究者として日本に滞在した。滞在期間中、受け入れ機関である名古屋大学文学部・文学研究科を拠点として、仏教寺院建築の象徴性と意味に関するタイと日本の比較研究に従事した。

【主な職歴】

1974年-1993年 教育省芸術局職員
 1993年-2005年 チェンマイ大学美術学部タイ芸術学科教員
 1999年-2000年 チェンマイ大学美術学部タイ芸術学科長
 2005年-現在 チェンマイ大学美術学部タイ芸術学科教授
 兼 チェンマイ大学研究サービス オフィス
 相談顧問

【受賞履歴（受賞年）】

タイ国立研究協会 賞賛研究成果賞（2000年）
 タイ国立書籍発展委員会 優秀ポルタージュ作家賞（2000年）
 タイ国立書籍発展委員会 賞賛ポルタージュ作家賞（2001年）

【研究業績】（代表的な著書、論文）

1. *Wat Raang nai Wiang Chiang Mai* (『チェンマイ市の遺跡寺院』, タイ語, Aroonrut Wichiankiaw との共著), Chiang Mai: SuriwongBook Center, 1996年
2. *Baan Chiang: Moradok Look Thaang Watthanatham* (『バーンチェン: 世界文化遺産』, タイ語), Bangkok: Ongkaankhaa khong Khurusaphaa, 1997年
3. *Ngnaan Sinlapakam Lanna kap Khunkhaa thii kamlang plian pai* (『ランナーの芸術作品と変わりつつある価値』, タイ

語, 編著者), Chiang Mai: Khana Wicisin Mahaawitthayaalai Chiang Mai (チェンマイ大学美術学部), 1997年

4. *Lanna: Singwaetlom Sangkhom lae Watthanatham* (『ランナー: 環境・社会・文化』, タイ語), Bangkok: Saengarun, 1999年
5. *Khruanpandinphaw* (『陶磁器』, タイ語), Bangkok: Ongkaankhaa khong Khurusaphaa, 1999年
6. *Moradok Chaang Sinlapa Thai* (『タイ芸術職人の遺産』, タイ語), Bangkok: Ongkaankhaa khong Khurusaphaa, 1999年
7. *Laaikham Lanna* (『ランナーの金の模様』, タイ語), Bangkok: Muang Booraan, 2001年
8. *Prawattisaat lae Sinlapa Hariphunchai* (『ハリピンチャイの歴史と芸術』, タイ語), Bangkok: Muang Booraan, 2004年
9. *Phaendin Isaan* (『イサーンの大地』, タイ語), Bangkok: Muang Booraan, 2006年
10. *Khuang Muang Lae Wat Hua Khuang kap Ongprakoop Khong Muang nai Dindaen Lanna*, (『ランナーにおけるクワンムアン・ホアクワン寺とムアン(国・町)の構成要素』, タイ語), Bangkok: Muang Booraan, 2006年